

さまざまなコリドー



生態学では、開発によって分断された生き物の生息域を繋ぐ帯状の植物群落や水域をさして、緑のコリドー（回廊）とよびます。ここに示した河川・運河や公園・緑地の多くは、生態学的なコリドーとしては狭すぎ、野生の生き物の移動ルートになっているともいえません。しかし、建物が密集する都市にあって、水や緑、日差しや風を感じながら活動できる空間を提供しています。たとえば皇居外苑は、多くの市民が利用するジョギングやウォーキングの名所になっています。廃止された鉄道の高架線を再利用したニューヨークのハイラインでは、混雑した道路を下目に、自然生えの植物に着想を得た線形の公園空間を散策するという、独特の感覚が得られます。

都市のコリドーには、もう一つ重要な特徴があります。人間の介入によって生まれた新たな自然、いわば「第二の自然」だということです。もちろん、その実態はさまざまです。たとえば、もともと生活排水を受け入れていたソウルの清溪川は、暗渠化された河道の上を高速道路が通っていた時代を経て、導水によって再生された水路を軸とする公共空間に変わりました。中川運河に関して、そのスケールの大きさとともに注目したいのは、運河という土木構造物の上に鳥や風が種子を落とし、それが発芽・生長して、豊かな植物群落をもたらしたことです。人工の器がもつ受容力と自然の営みの力が結びついた結果が、中川運河の緑のコリドーだといえないでしょうか。

絵で見て考える中川運河の「らしさ」

都市の「らしさ」は、直感的にはわかっていても、言葉にしにくいものです。視界に収まらないスケールの大きな特徴、目前にあって気づきにくいリズム、意識化されていない付き合いの作法など。

そうした言語化しにくい町の底流をつくる脈を可視化するために、『絵で見て考える中川運河の「らしさ」』と題する本シリーズを制作しました。

絵からヒントを得ながら、未来の都市づくりのために想像力を働かせましょう。

『空間コードから共創する中川運河』
鹿島出版会(2016年)
ISBN: 978-4306073203、2,500円+税



中川運河の空間コード

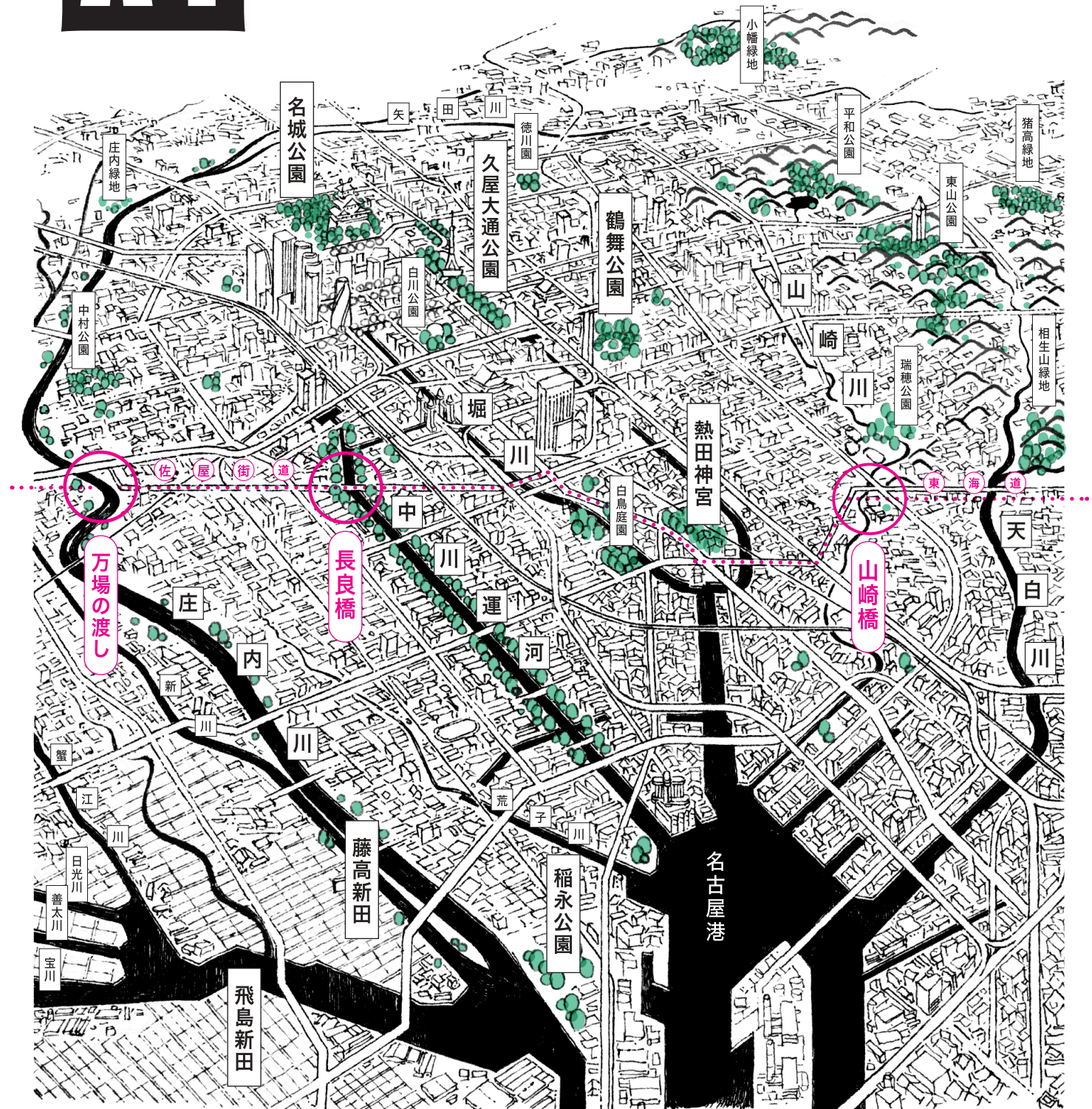
- A1 海に向かう都市の層 (2018/12既刊)
- A2 開門式運河の水面 (2018/03既刊)
- A3 人工の自然堤防 (2021/12既刊)
- A4 緑のコリドー (2023/12既刊)
- B1 運河を挟んで向き合う (2019/08既刊)
- B2 インダストリアル空間 (2020/02既刊)
- B3 鳥と風が運ぶ都市の緑 (2020/09既刊)
- B4 連続体の美学 (2022/10既刊)
- C1 名古屋の大静脈
- C2 インタラクトする水土
- C3 「自然」とのつきあい
- C4 創造力の空間

『絵で見て考える中川運河の「らしさ」』A4、2023年12月 制作・頒布：都市コミュニケーション研究所 (riuc.takenaka-lab.net)
代表：竹中克行(愛知県立大学教授)、イラストレーション：クレメンス・メッツラー、緑被分析：長谷川泰洋・竹中克行、解説：竹中克行



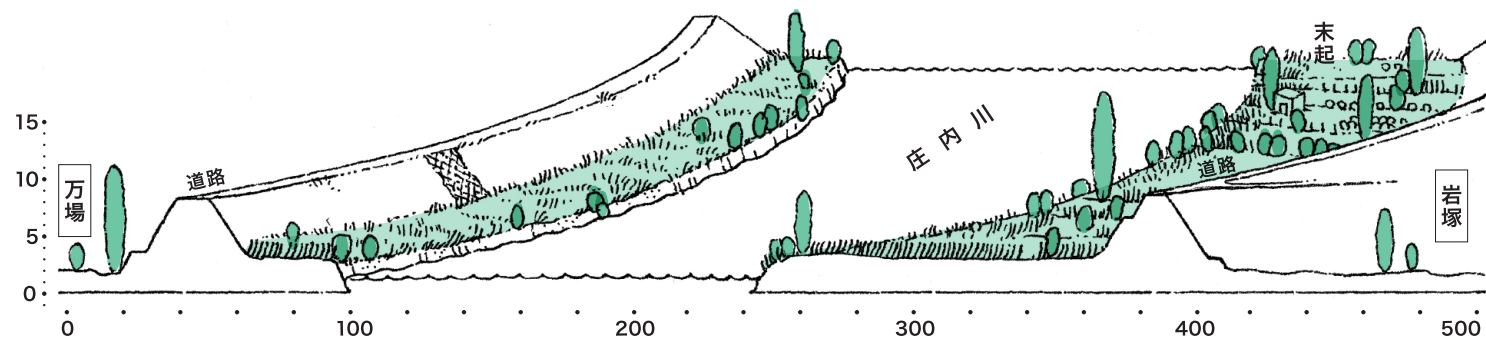
絵で見て考える中川運河の「らしさ」

緑のコリドー 産業インフラに育った意図せざる緑



名古屋では、数多くの河川や運河が港に向けて収斂するパターンを描いています。市街地の両側を流れる庄内川と天白川は自然の河川、中ほどを貫く堀川と中川運河は人工の水路です。そして近代以降、生活利便性の向上を目的として、東西・南北方向の道路網が整備されました。東部の丘陵地ではこの格子状パターンが崩れ、市街地の合間に広大な緑地が残されています。西部の沖積地には、現在も水田を中心とする生産緑地が広がっています。そうしたなか、河川・運河の周りに発達した緑には、どのような特徴があるのでしょうか。

① 庄内川(万場の渡し)

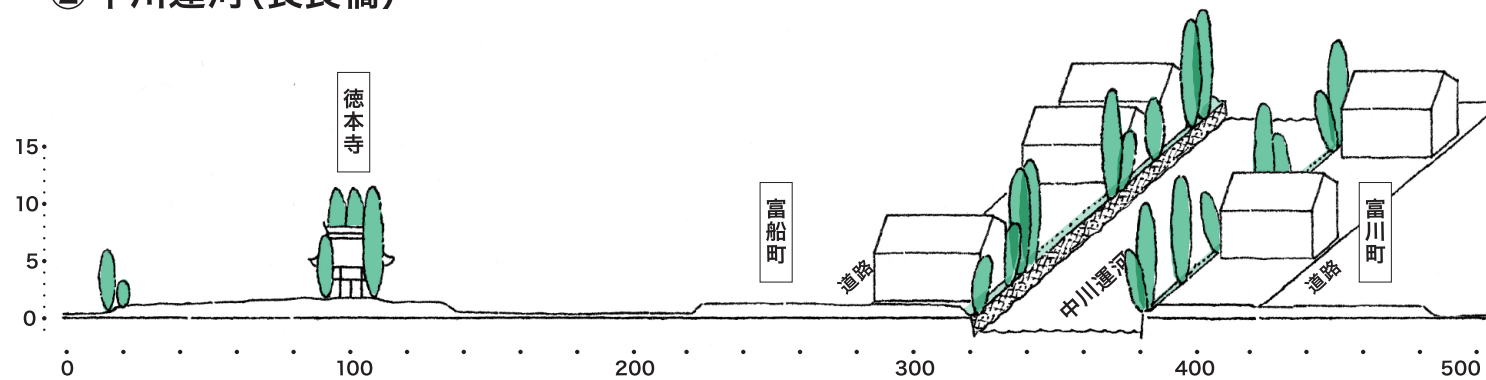


庄内川は、岐阜県恵那市の夕立山に源を発する一級河川です。下流に位置する名古屋市西部には、庄内川を水源とする幾筋もの用水が整備され、かつて名古屋城の堀に注いでいた御用水もその一本です。庄内川の

両側に形成された幅広の高水敷は、畑地として使われ、現在では運動場やゴルフ場などが多数立地しています。佐屋街道が庄内川と交わる場所に設けられた渡しの両側には、宿場町の万場と岩塚が成立しました。長年の治

水事業を経て、現在の庄内川は高い堤防に囲まれています。しかし、上流部の水辺林との生態的な繋がりを保っていて、高水敷にはヤナギ類やヨシなど、湿性の植物が広範にみられます。

② 中川運河(長良橋)

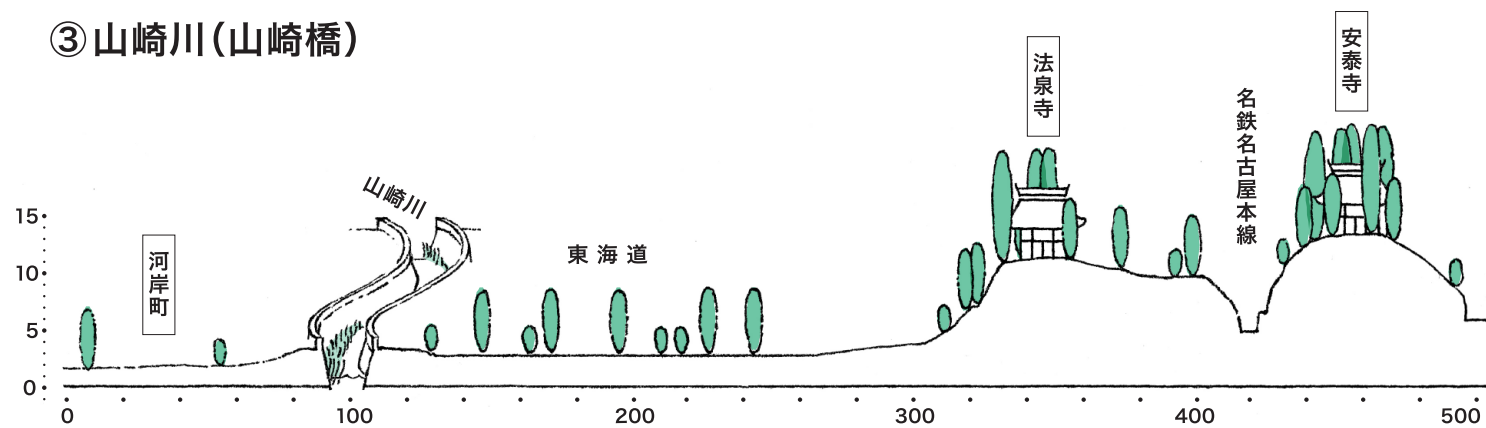


1932年に全線開通した中川運河は、かつて笹島貨物駅があった都心部と名古屋港を結ぶ人工の水路です。近世干拓地に掘られた中川運河の水面は、標高ゼロメートル未満の位置に設定され、これを名古屋港および堀川と接続

するために、両端に閘門が建設されました。水位一定の中川運河は、いたるところ荷の積降しが可能な「細長い港」として機能し、現在も、行政的に名古屋港の一部をなしています。興味深いことに、中川運河が緑のコリドー

の様相を呈したのは、運河の水運が衰退した後のことです。遊休化した護岸地にみられる樹木の大部分は、近隣の社寺・公園などから運ばれた植物の種子が発芽・生長したものです。

③ 山崎川(山崎橋)

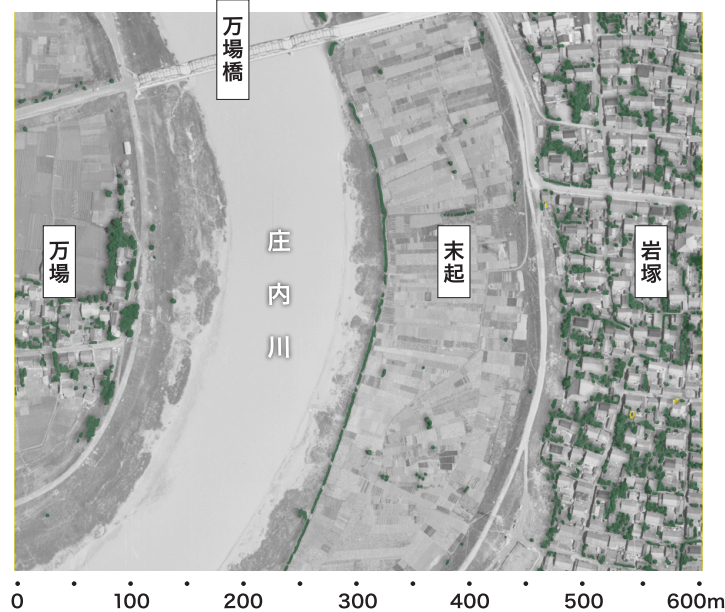


山崎川は、平和公園内の猫ヶ洞池を水源とする二級河川です。名古屋城下町が成立した熱田台地と尾張丘陵の西端をなす八事層に挟まれたエリアを南下し、瑞穂公園付近から先は沖積低地を流れて名古屋港に注ぎます。

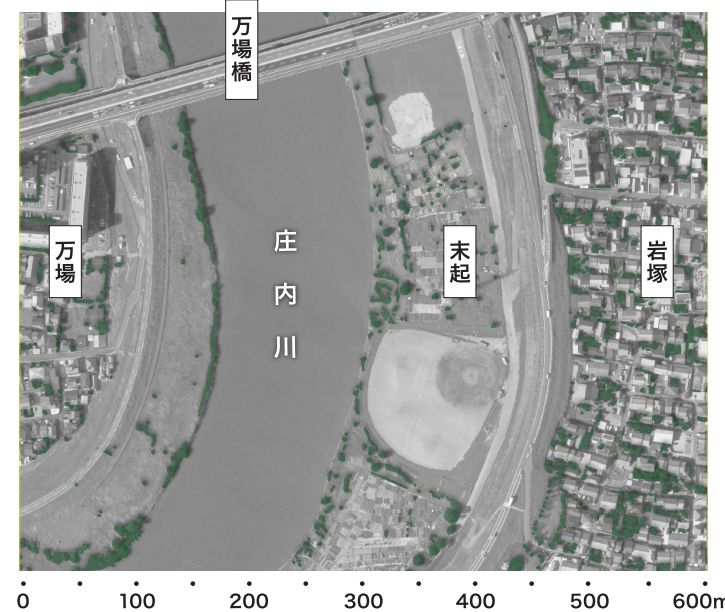
成り立ちこそ自然の河川ですが、ほぼ全線が市街化され、コンクリートブロックなどを用いた堀込ないし有堤の河道をなしています。水を涵養する山林が乏しいうえ、下水道整備が進んだ結果、大雨時の下水からの溢れ出し

を除くと、市街地の雨水が流入しづらい状況となりました。旧東海道が通り、緑豊かな社寺が点在する山崎橋のエリアでは、近自然的手法で整備された水辺にヨシ群落が繁茂しています。

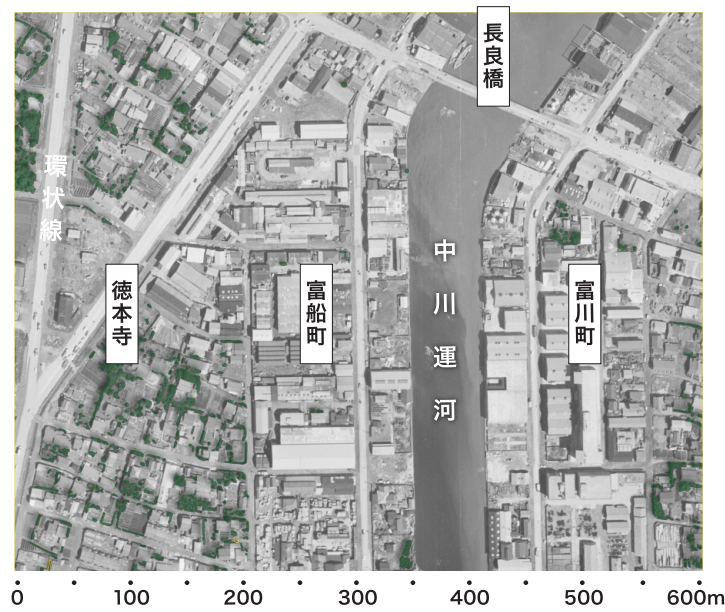
1963年



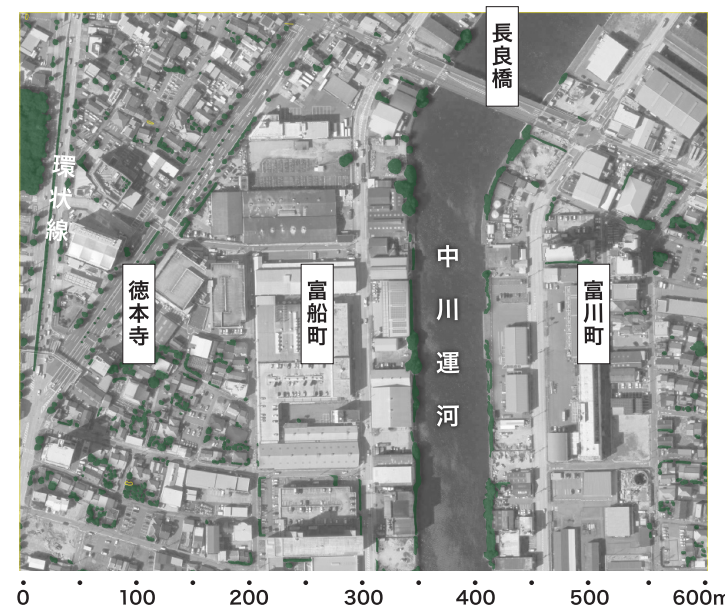
2017年



1963年



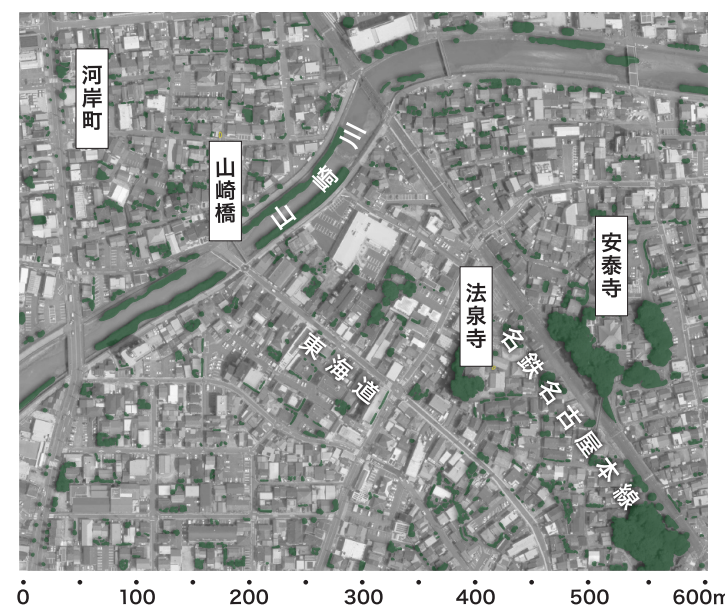
2017年



1963年



2017年



国土地理院空中写真(1963年撮影)および名古屋都市計画写真地図(2017年撮影)をもとに加工・作成。
緑色の着色部が緑被(丈の低い草地は除外)にあたるが、分布パタンの抽出を目的としているため、厳密性はない。